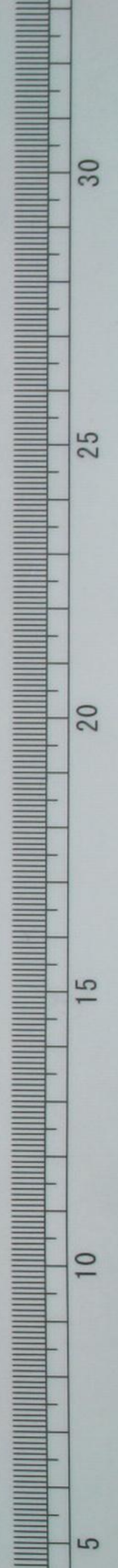




養新漫筆

昭和十五年一月起筆

特別
14
1919
502



養病漫筆

昭和十五年一月起筆



○余今年八十一歳と近山梅瀬四年余の居の二刻を
 刻す、文云く春城庚辰八十有一と本年入りしを
 此印を用ひべき歟、余七十歳の時股部耕石余の若の春
 城七十以後所作の印を刻す、烏兔又々早く
 十年と経過す、八秩を踰へる、余の三息外とす、
 所殊、四肢未病あり、八十一歳の印をいつまか
 用ひ得べきか、日暮の感なき能はざる也



○此余の無友、星城先生の紀行と得たを特々
 騰字して送り、未だ、庚辰丑年、再江、下、遊子の



春早

望希玉兒 春 早

斯(去)及(ハ)ハ(ス)と(取)つ(て)可(い)

○金根津と一面勘書了當と同之故又と此人を訪ぬ其の
所蔵の古印古玩を閲覧せし時根津ハ余ヲ誘フ余ハ家
ニ骨董書畫並ニ古印ヲ鑑識せし時此止むを得
し集まり来るものありと、彼人の何れも引けず物
あり他人の購ひ得ざるものと迫りて購ひぬ彼人が古玩を
所蔵也、彼人の茶儀と昇ふ茶室の才一とらひし
彼人價を論じし時、購ひて備筆一と抜く、彼人の書畫想
あへし、彼人の酒を度々飲ぶ、備しりて昔の酒を
嘗て一洋酒ニ切らし二升の酒を平けりし時、彼人の
我儘欲するを飲り人々をたしめ、而も我儘を一生やり
通したる、彼人の彼人の所か、

横京製

○家ノ蔵の書畫幅一時千幅、及心算も大書畫、通を家と改定
する時、其資を定めて一或人と全部を賣印し、中々友人の故く寛
日賣印し、古印五万等あり、其後集りしもの亦一昨年賣印
し、今ハ幾許も在り、故く、次の閑と得し、教諭の書畫、中々家と
と異の家、殊にあへし、このを別置し、更に其の故く
就て日帳を作つて見る、小品部数、甲幅寸絵畫、二十画、
普画尺幅四十、書物類二十、額面十、數目並併せし、
る、其ノ點あり、此由尚ほ他家、あり、へせ、其ノ若干あり、他
ハ賣印し、し可る、よある、其ノ多、價を、其ノ也
但、此寸絵畫冊と若干の印、と大隈、後、其の、山崎
の、ハ、あ、かの、候、あり、其ノ、最早、其の、販賣、の、念、あり、其
由、概、と、得、し、賣、印、し、ん、歎

家と共、古く保家と云ふ事、書志の左の如し

代徳、家中庸、全、各書帖

白雲、海墓、法、然、海、為、首、為

秦、嶽、為、存、為、為

三、政、公、寸、珍、の、如、く、草

作、之、向、蒙、山、楮、言、仲、氏、の、序、跋

秋、月、種、竹、楮、言、仲、氏、の、序

和、久、在、一、の、日、誌

秦、嶽、前、讀

前、原、一、誠、の、忠、告、の、即、義、帖

奥、平、居、心、前、原、一、誠、書、簡

和、久、同、并、久、港、公、詠、歌、類

曾祖母詠草

秦嶽詩稿

芝考心教字小寫經

田原家の記

久澄(あ)宮殿下御成生記

壬生卿「実録」二字款

家廟遺影

家廟遺墨

半尾成法手款

和久史(あ)宮殿下御成生記

曰大日本史 冬本

得所詩存

金華山御遺墨三

伏見御詩帖二

板口五峯慈血石歌 二幅外二卷一

秋月古香梅徑真若 一付幅

以上の家書と共に別函に納め前掲の日六外のみより
 若干前掲目六中より若干を此部数に入へべきあり
 尚ほ余の宛書前数一切を印を欲せ此程
 成巻の旧友書簡五十巻を別函に入ん混乱せし用
 意とるべきあり尚ほ巻とるべき書簡数数百紙
 あり皆大正前のみより故旧の書簡頗る多し
 今整理の途ありしもすなはて存留せしむ
 ○無印法経法に登載せる余の新文中若干の隠字あり



ちねんを記しぬめりし御遺墨書、西界は未だ載せし「林」早稲
 子報に載せし「中村進平居士」手稿のたるべきに「揚」を
 田居士と訂正し「前掲」の「林」等、前掲本年に入りの隠字
 と保てて八の命のり「揚」を訂正し「新法河内」に「揚
 けり」山内雲巻の「山」と秋月古香の「山」と訂正し
 印、就しを併せし「山」地りの隠字に入つて、
 二好と遺墨に「山」あり「山」を保つてぬめり、
 ○新巻向の成文書「高」を訂正し「山」の押
 墨山「天」を訂正し「山」を録す、余の宛書に「山」を
 訂正し「山」と訂正し「山」を訂正し「山」の「山」の
 字を訂正し「山」を訂正し「山」を訂正し「山」の
 山向の「山」を訂正し「山」の「山」を訂正し「山」の

一五十年の日月を要しつると云ふ、高徒の家の人と云ふ

周易

上經

乾上

乾元亨利貞

初九潜龍勿用

九二見龍在田利見大人

九三君子終日乾乾

夕惕若厲无咎

九四或躍在淵无咎

九五飛龍在天利見大人

上九有孚于飲酒

无咎濡其首有孚

失是以上經文

天保辛丑十一月癸酉

里村榮英棟繩書終

珍しくも書冊也 此中草書と鉄きコエリが和紙と青き

る例のありとも別紙合部 （漢字） もコエリが和紙と青き

色く一の例うん此人の作る素向を知ること

と致す（一月廿四日）

○セメント藝術と云ふは新らしい洋の文が金属の代

用とセメントを用いるから斯の新派の洋の文が金属の代

用とセメントを用いるから斯の新派の洋の文が金属の代

用とセメントを用いるから斯の新派の洋の文が金属の代

用とセメントを用いるから斯の新派の洋の文が金属の代

用とセメントを用いるから斯の新派の洋の文が金属の代

用とセメントを用いるから斯の新派の洋の文が金属の代

用とセメントを用いるから斯の新派の洋の文が金属の代

用とセメントを用いるから斯の新派の洋の文が金属の代

○往年安芸の本社人の控へ常務係を録する時余曰
社の記者取切終去を余の宗家の言を筆に録せ
しめたるもの今皆忘れ、當り其の記の切ぬきを花し
やも今尋ぬる由り、頃者成母一と示さんとい
安芸の本社を就て求の漸ゆく得ず、即ち明治三十六
年の新紙に於て五回に亘つて登報さんといふ余の
知る限りを録し今もなぬるを、頃者市治成
家史をえ油いつてある、之を資料として供えんとす成
一市心推之丞の系統より其の盛時を忍飲を以て
たえんる家こ、我百姓間に可市の記簿を以て別
つよん也(頁三十一記)

○新沼林枝と抄録して感す、林枝の表色は其土の



○本年新沼に石川流高の作品展覧会を催し、折立形
の枝取酒井千守の家系の流高を屋敷大画院全派の
大書幅を並べしことあり、本年より東に又流高合
川一七全判り見る流高の、かお守丹の古牒に授
ふと境内控へかり、依又開家山の流高の画も
管揚し、長久保と、宗山が流高の折山を、宗
家を受けける山、幅と併せ、此故ありしことあり
と報す、而して宗山の流高の大幅を、

ハ予の書つて書きしより余のハ一尺二三寸
許の横長の紙に書きしより恐らく大抵は
を去りて後の書きんか、梅山を象山と贈りし如
怖り余の如く十所のみとす、千尋の書状に梅山ハ
大幅として左の款あり

雪山而書 倣米意陽之筆

丙戌槐花月上浣方

香岳社台教正 侃齋元啓

とあり、巻止め

象山依之同先生見訪喜慶偶聖詞桂北幅
先生一見感賞不措賦七言二篇見惠
去天保九年夏也 本林軒主人誌

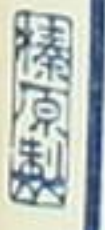
此の巻筒の色恐らく梅山筆の筆す、梅哲所記
す、依之同の書幅は横長の紙に得後に画物を
付とあり、右本件ハ之を繼ぐことあり、梅山
筆とあり、象山と推し、誤認する、因、云
梅哲ハ象山筆す、象山家有恒ハ其二男也、余の
書幅象山筆幅ハ何人の筆すあるか、あるの今ハ現出也
（この年の博とす、所也、二月三十日記）

偶々書畫骨量難法と字有稿を需めらん、不遇の画
家石川侃齋と名を以上のみき、梅山を去き礼
してあり

以上は春曉進龍石、酒法に投移するもの漸く新年御
事現る、則ち多とありとあり

○前の世の當房流を、野々々、他河家のありたり
一取待の天王を、神事作也天王の、今家所在の地
の宮初より、代河家の、おのの字、ふ未れ家を、移さしり、時
より、此の世、いつしか、あるか、七とい、地を、沢地を、干
拓漸く、現地と、開墾以後の、神祠と思、い、
今も、祭りの、葛原、通、も、七、娘、も、子女、多く、来、の
う、り、く、壯、ん、ろ、ろ、村、火、寄、也、河、に、云、く

陸奥天王宮、昔衣行ふ禁、沙然三伏、日、
笠夏一初、踏、山色、東、ち、眼、湖、形、北、海、心
親、坊、式、漁、採、無、又、鏡、帰、吟



本

六月五日、陸奥天王宮、市島書文口

代河家の出家、持、ま、り、ふ、三、物、三、品、も、ま、り、地、持、半、紙
大の、小、変、を、押、直、ま、り、な、り、ま、り、ん、も、御、出、ま、り、柱、を、ま、り、
こ、こ、と、進、ま、り、亦、架、中、の、珠、を、ま、り、足、を、ま、り、(十、五、年、二、月)
あ、り、ま、り、天王、を、ま、り、昔、一、河、の、通、の、開、拓、の、時、あ、り、ま、り、
通、じ、此、の、干、拓、す、ま、り、開、墾、し、ま、り、而、し、て、天王、を、ま、り、
合、つ、て、お、祭、り、を、し、ま、り、お、祭、り、か、ら、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
神、と、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
北、熊、を、飼、つ、て、お、祭、り、を、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
お、祭、り、か、ら、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
庄、の、あ、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、

又奥き人の夢かすの歌をうけし鬼の夜更けを来は
生けりて

凡人の身はいくらも天地の心をぬれ候くもわらうは
暖気の抱負の心ま末向のこころで

風の梅斜にあきし教うか入る葉あうつ口半あゆの宮
吹きおろす風の松の葉散れつげ千あう聲あう物の人

床に啼くこほろき橋を渡り見し御倒んを寝こころのよき

俗人の心地とこころ向合の詠し人他にあきし人
三時よつて

口御出ををほら毎一人を指導ありせし上は犯し難い情
威あきし左の御さす教首は氏名と思へば念ふと共に
の庭にあきしよのを勵まし御政を行ふよき御せし御せし

標原製

あきし吹く世を御く人こころいははは根さす
松のこと

小山田の畔のほそ道御せしあきしあきし
い

田のなをうせし一人とあきしあきしあきし秋
のまををあきし

菊の光根のうにせしあきしあきしあきしあきし
あきし

あきしあきしあきしあきしあきしあきしあきし
あきし

あきしあきしあきしあきしあきしあきしあきし
あきし

千とろつしの仇にあらぬとわきぬをせまふのいのち
ろくろ

親のにはの害とあまふはまが待たははまを
あしける

梅のえん柳のあまきの子けふ風をこころま
ろくろ

朝雲のあまかんと山あけの遠のくま母を
る

「そのあま古きれぬとせむつちしき母のこ
ろめぬ

おのから仇の心も魔くまはの道とあま
れみ

標原製

の宇佐の漢と程りやりの後流を交へてあるの端も
自今の際宅の事と進んた今へまへに長巻を改築と
今昔の向目かき、遠長屋もかもとのまあんの
切り心と花と取拂もて其あまの住家か出来ぬ
と鈴木とまふ神主か住しておる、隠居をたの
て前より一減か住んたあまも今保あつたといふあま
をせぬ、鈴木にあまの道を集めて教育する所といふ
云あまの道とまへに、隠言の危あの中へあつて、川
か川か通して橋も築いてある、隠宅の二階、少しは
つと、廊下へ行くとも、茶室用か、小座敷か川へ
此の隠宅の二階かあると、まへに前原か起臥を
下り、坐敷かあり、はまの茶の召かあり、ま

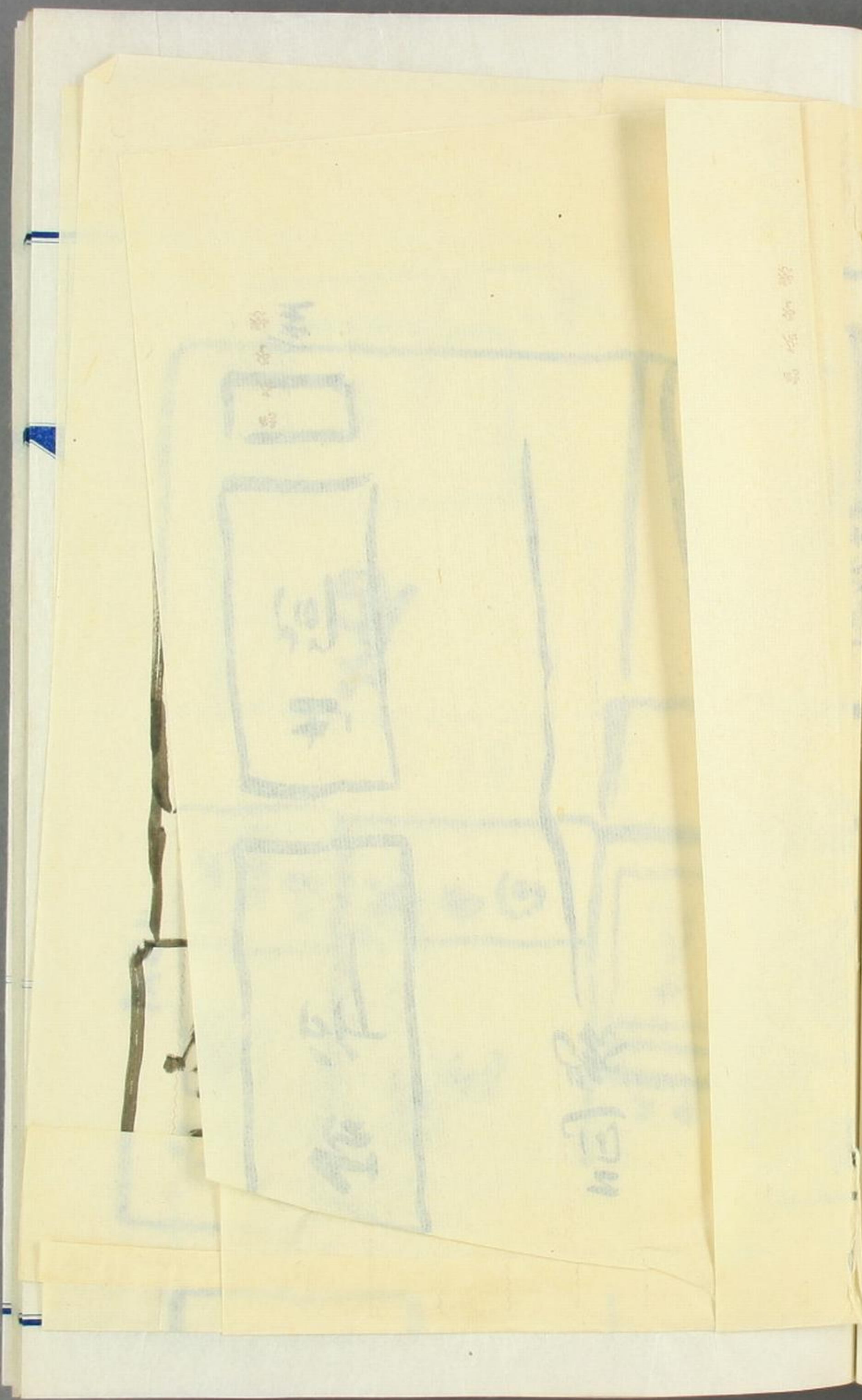
隅の小屋があり、是より奥深い押入があり、堂の向ふ
基所の邊に二室があり、便所や湯殿もここに在りた。
橋をわくと西側一帯は倉庫がまじり無味堂もあつた。大工
屋も、米蔵が二ヶ所もあつた。この裏つらあり、狭い坂
かちつた橋があつた。北基のよかへり、長屋も変じ
母屋も土蔵二ヶ所あり、長屋と云はれ、いから
長屋の長屋の真中と云つた。こゝにあり、
貞和の元治廿三年の昔年、禊ぎの途、春の時一時禊堂に
ゆ。又此の長屋も西宗家の九月、弟正三郎がこれ。自分
正三郎から借家して、庭の方面に別つては、廻り三四室と
廻り二三室を占めてゐたが、其の令れ、廻りつた。
又後十の故山、供二三人をまゝ、帰省した時、小供

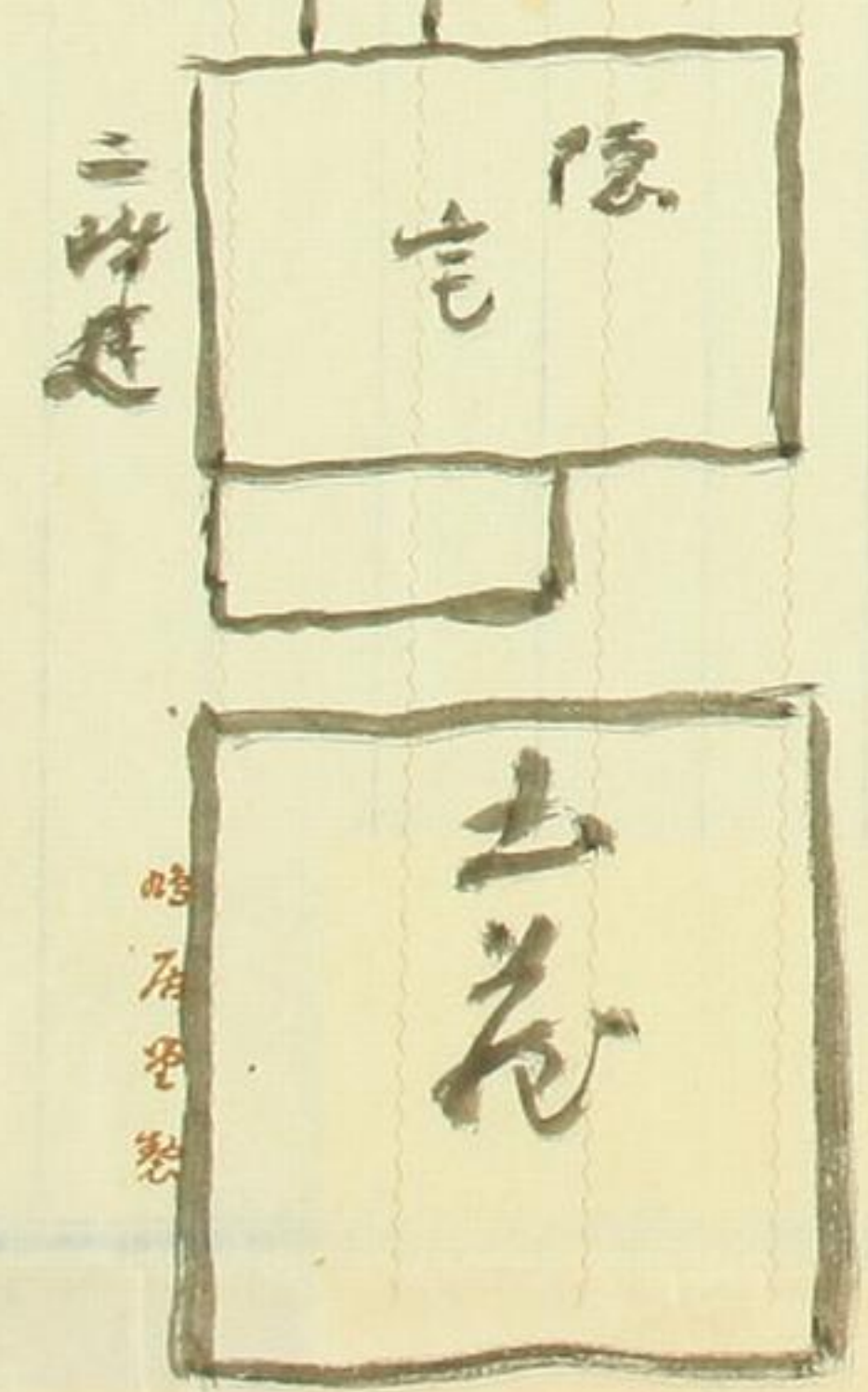
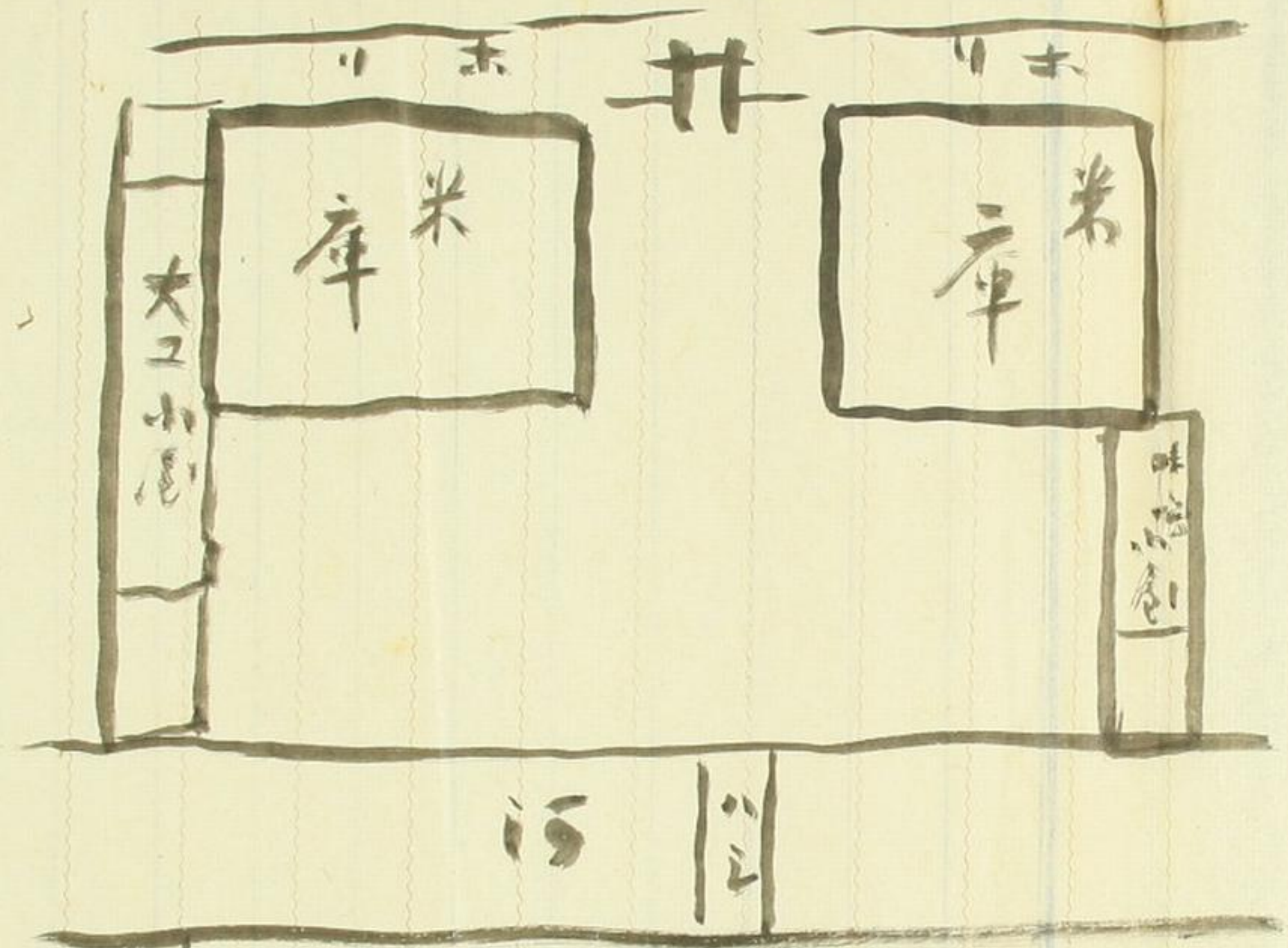
徳京製

自家の菩提地と云はれ、いふと、裏つらあり、所を
見ると、橋も、こゝにあり、或んと形が、今も変じ
敬つた、いれにありた。其後、十数年物、あり、こゝに
ゆ、こゝに、近年の、人、こゝに、一、あり、こゝに、
つても、いつ、も、宗家の、四品、天相、山、こゝに、人、と、今、今、
この、山、を、尋ね、た、今、こゝに、過、た、五十年間の、変、
つ、ま、こゝに、今、こゝに、後、定、り、お、ろ、こゝに、
に、帳、を、た、こゝに、と、得、た、こゝに、

此の、徳、を、り、堂、祖母、が、成、成、の、秋、多、あり、こゝに、
の、印、の、時、の、相、り、こゝに、ま、こゝに、
の、ま、ま、り、人、曾、祖母、の、親、族、と、高、の、和、平、と、ま、人、か、
母、の、和、親、と、ま、り、こゝに、後、山、三、り、の、時、こゝに、

千入と川方と親しむ得べく大まかき室を造つたが、その
 方の風致を模つた。丁度此の臺をの向ひ側、即ち川を挟む
 所なる大工小屋に、改り大工を動かす所の家が、あつた。まことに
 叔父の一言吾輩が、幽閑としたことか、あつた。母が、おひやあき
 さい、書いし、費つた、ことを、思ひ出さ





井園

千入と川方と親しや得べく大まき室を造つれば、
 為め風致を損つた。下座此の臺を向ひ側、即ち川を挟む
 船もろ大工小屋、随う大工を動かす所、
 叔父の常吾表が幽閑とせんことか、
 毎分を扱ひよき信
 ちの書いす費へんことを思ひ出さ

とて作つれ
側即ち川
一字かあり比
かかたひ

土倉

土倉

井

通路

台所

土間

貯
石
室

庭

十
キ
ス

所
寢

土
倉

室
書

申
進

向
の
次

香
室

室

茶
の
間

店

〇二月三月毎日無聊を慰むるに日課として古の
 書や漢書等の物語をうと神皇正統一と秘蔵の古手
 玉使用して更々破化せしことと欲するも
 不出つ、如斯く書き教ふるも、乙冊十冊に及ぶ
 其日左の如し

- 魏書
- 代序
- 雅詞
- 花月帖
- 花月帖
- 同吟
- 同吟
- 古の漢書
- 心平
- 美々録
- 至全
- 美々録
- 美々録
- 川柳子

藤原製

〇家元の同士の交々を今に所し今も或許ありし
 但れ、早大の交々を鉄如のより百餘冊を遺して今も
 其、其の故本ありき、その形も亦、中々名家の白

- 山陰
- 大江
- 大隈
- 兵部
- 廣島
- 大隈
- 皇
- 柳橋
- 官本
- 小中
- 伊表
- 安

版下よりき名家の文集二十冊等早大用之終るは謝書
と共に以ぬと字色もやうやくも委的、見入揚るまに
引、亦は同を致る字色もやうやくも委的、見入揚るまに
ハ才二回日各贈る

○四月甲、中央公論社と余の既刊隨筆と今般的の編纂
して六冊本とす、既刊見ことと申込を未だ、余の既刊隨筆
十七八種あり、且四種は湯と文人墨客と語る、二冊、八頁、
業刊の目録に加へる、然りず、又今般的の編纂も好まら
せんも、既刊の隨筆、人々多く得難き迄、品不足と云ふ、
或る形に出ぬ、一重しも後、何くも、不可なり、とて、
と、さう、左の如く、分類して十種、既刊隨筆、と材料を
取ることあり

東京製

1 田原録

- 2 雅俗相半録
- 3 山ぬ淋記
- 4 人物新観
- 5 趣味談叢
- 6 讀書録

冬冊五百頁六月甲一冊を發行する、預定とす
○大槻文彦の死後、彼公漢の詩文、字部都肉集の版本が
主印、これに時誰か買手、心よく、二、三、文の復、あるのを措
く、思ふに、買取つれば、今も早大出版部の倉庫に預
け、たま、自らの之を、仙臺、田原録、の字部都肉集の復、
在、あ、して、これ、所、田原録、の、長、か、字部都肉集、を、
復、

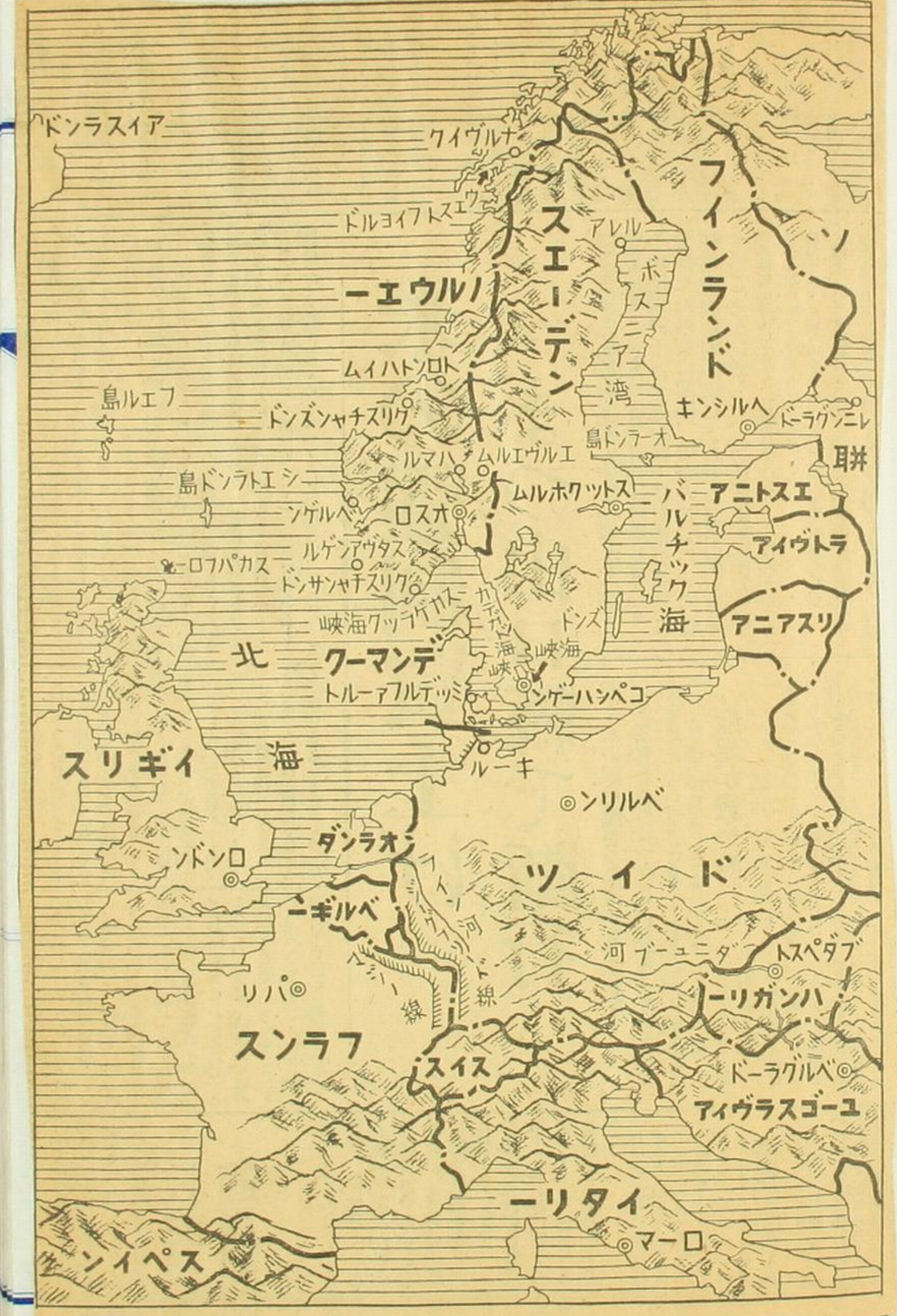
花を親ら、今花り七合あり登りてうりり見茶えり、昔も
けりたり、荒干開きたりやも未だ煙煙とよきありたり
の原をえを殺するも、
ふ、協和館の品あり、敢作庭の品も初めしる所
り、公園とて、今改むるも、不完全の足と杖とれよ
り、数所没歩し、心口さふ何れも、さるる、さるる、
傾くるといふも、酒と痛し、さるる、さるる、
こが、水に浸れぬ、さるる、さるる、
北の、さるる、さるる、さるる、
駆り、終る家、の、さるる、さるる、
健歩のく、往り、十数丁歩する、さるる、さるる、
さるる、さるる、さるる、さるる、

○横山大観山と海と遊りて、谷十幅の積物と、二、三、五
五千円と、さるる、合計金五十萬圓と、海軍と、さるる、
り、さるる、さるる、さるる、
代の、さるる、さるる、さるる、
こと、さるる、さるる、さるる、
其、さるる、さるる、さるる、
の、さるる、さるる、さるる、
料、さるる、さるる、さるる、
○特記、さるる、さるる、
○文の、協和館、二月、さるる、
茶、さるる、さるる、さるる、
味、さるる、さるる、さるる、

○日清戦争が起すより次々三ヶ年とらうと我邦未嘗
有の大戦とあり、是等の戦事も二十億の甲斐なき事とせば
今も毎年百六七十億を費しともならず、一般の國考する所
極大にして百億の國の上りもならず、抑も漸く鉄道を
之を生じ、米炭と如き砂糖の如き各産物からマツタケ

かき細くしるまを皆欠乏とせり西洋を舶載のよあハ世
品のまゝ今日得難い木海の数に絶對するも徳分
日本も窮乏の極に達してはるゝと見てもわが国を
あて、廿分の利益を以てとていふとあつた不景氣
を以ていふ有餘である。以今の先見時節いつか却ち
各所の民衆の歸洋する時が来ると本邦に於てはさうい
つもの如くぬきぬき欲ふとあらぬ天を垂らすとてはるゝ
出と来た人河の伝説は二百年の昔の大教のこの世に
為の文と枝を以てすゝ給法にて、要務の為めの人か
入り出の減回もさるゝ想を上げ、漸次まゝに
棄つれと湯を貯るの如く、地を離れて世を去るゝと
てある位に此等の物語はさうとこの成る所もさるゝ

七月、日本の地をへつゝ感えがたき、
兒ハ一由五十數名の多きも、連したるも、此の而も、
のこゝに、兼ち打ひちかた、
利する安の如く、
及ぶひ、
四民窮乏の如く、
可なり、
亦、
別、
改、
元



短期、持久兩作戦に 獨、優位の態勢

英佛の奪回戦展開へ

我専門家の観測

ヒットラー獨裁統帥の電撃作戦は、またしても快進曲的にデンマーク、ノルウェー兩國に對して敢行された。この鮮やかな電撃作戦は、果して如何なる目的と意圖をもつて行なわれ、またこれを契機として今後の歐洲戰爭が如何なる新展開を見せるかは頗る興味ある問題であるが、右に對して軍事専門家は次の如き観測を下してゐる。

大戦勃發以來ノルウェーは物資に極めて豊かである。この物資に對しては、直接の補給をなす國家として、獨逸はこれを必要とする。獨逸はこれを必要とするのであるが、ノルウェーは中立を主張してゐる。この外に、ノルウェーは、

デンマークを占領した場合は、北海方面の獨逸への物資輸入は全く遮断され、英はまたスウェーデンの南端から獨逸に物資を送りつける得る態勢となり、その優位はいふまでもない。

さればこそ英獨互ひに監視状態を維持せねばならぬのである。獨逸は獨逸の法則と獨逸の武力が獨逸に有利なものである。獨逸の電撃作戦が果して一説に意圖したものでないことは以上によつて明白であるが、相當の

後からする英佛の隱密作戦には、非常なる不利を伴ふといふ。獨逸の作戦はすべてに對し、深い考慮が拂はれたといへる。

大部隊を、ノルウェー北部に送り、その海軍基地に上陸作戦を行なう。獨逸はこれを察知出来なかつたこと、意外の不慮といふべく、しかも獨逸はかねてノルウェーへの武力行使につき何等かのきつかけをねらつてゐたもの、如く、獨逸は、

ノルウェー沿岸に獨逸の艦隊を集中させ、獨逸の艦隊を集中させ、獨逸の艦隊を集中させ、獨逸の艦隊を集中させ、

獨逸の艦隊を集中させ、獨逸の艦隊を集中させ、獨逸の艦隊を集中させ、獨逸の艦隊を集中させ、

坐して、時々風流の雅びをやつた、其の逸事がいろく傳はつてゐる中に、某月某日蘇東坡の赤壁の舟游に仿つて墨江に舟を泛べることを家例とした。勿論妓を載せ杯盤も備へての豪華の燕樂であつた。侯は自家得意の詩書を自縮緬に染め立て、それを柳橋の妓に着せて伴ふたと云ふから其の豪奢は思ひやらるゝ。侯が外に遊ぶ時は一人の家僕をも伴はず必らず今の荒木十畝の先考寛畝を伴ふたと云ふが、萬一の事があつてはならぬと、其頃の俠客相政が見へ隠れに警護したと云はるゝ。侯の妾は實は相政の娘でなくの美人であつたと云ふ。

當時朝廷に彈正臺が置かれてあつて、大官の行動を監視した。容堂の豪奢の如き、彈正臺の注目を惹いたかも知れないが、幸ひに侯の友人秋月種樹が其の吏員であつたので、侯はいつも豫め書を寄せて、自分の行動に對しお手やはらかに願ふと頼んだことが再三あつたらしい。自分が曾つて一覽した秋月宛の書簡に、墨江舟游につき赤壁に擬する游は自分の家例であるから、どうか見のがして欲しい

拙刻唯今迄カ、リヤット落成献上仕候、足下ハ下戸ト存居候連夜之獨酌決而不可以下戸目、雖然勤番之獨酌誠ニ氣之毒之至、此杯當與金釵紅裙對酌如何 念三夜

古香雅兄
春村桑者

尚々自然生ガ鰻ニ成ルト云ハ承居候、鯉ガ唐芋ニ成ルハ珍ラシ呵々

此書簡の尚々書の下段の諧謔は解し兼ねれども前段と好對たるを失はぬ。扱而古香は秋月の號で、高鍋の藩主で、文を能くし、書は晩年變じたれど矢張り山陽風で、南書も堂に

と云ふ意を洩らした書簡を見たことがある。此の手簡は今誰れに藏せられであるか知らないが自分の手にも秋月に與へた面白い一簡がある。それは

侯が秋月の爲めに印を刻した時添へたもので、印二顆も幸ひに自分の手に歸してゐる。矢張秋月が彈正臺の役人であつた時で、印の欸識には戊辰の夏とあるから明治元年である。秋月が宿直の孤閨を氣の毒と思ひやり、杯を贈つて、金釵紅裙に當てよと諧謔を弄してゐるが、書も文も山陽書簡と全く面目を同ふしてゐる。左に其全文を擧げる。

拙刻唯今迄カ、リヤット落成献上仕候、足下ハ下戸ト存居候連夜之獨酌決而不可以下戸目、雖然勤番之獨酌誠ニ氣之毒之至、此杯當與金釵紅裙對酌如何 念三夜

古香雅兄

春村桑者

尚々自然生ガ鰻ニ成ルト云ハ承居候、鯉ガ唐芋ニ成ルハ珍ラシ呵々

此書簡の尚々書の下段の諧謔は解し兼ねれども前段と好對たるを失はぬ。扱而古香は秋月の號で、高鍋の藩主で、文を能くし、書は晩年變じたれど矢張り山陽風で、南書も堂に



古香



心如水



山内容堂侯刻

入り曾つて御覽に入つたこともある。侯の印刻は素人の域を脱し欸識も立派だ、土佐には壬生水石と云ふ印人もあり、侯の印を刻してもゐるし、又侯の刻風が如何にも水石によく似てゐる、或は侯の篆刻は此の印人の補導に由るものではあるまいか。

刻、早不ハ不日イ符呈刻刻表交之證
 册、其全文を舉げる。

山西書簡を全く面目を同え了る。
 二當了ると指畫を弄了るは、書き文
 の畫を思ひやう、村を觀へ了、金鐘孫
 肥當元平である。煉日は尙直の庭園を
 却了、明の録歸にお丸氣の夏である
 である。天連煉日は朝五臺の對人である
 の了、明二課を幸心の自代の手了了了
 刻は煉日の爲に明を候了了相添へ了



山 西 書 簡



山西書簡

の家附であるは、その代原のは了了了了
 前了、墨爲供簡のへと赤墨の辨する新刻自代
 了了了了、自代を辨了了一了了了煉日家の書

多味刻
 ある。
 一前代

○他トの陽ハ、スクラフ、ブック十冊を拾出したん
ハ若干の首十稿類が貼付してあるけれども、多くはブ
ラシク用不足りことを思おも、バラバラとちぎれてる
故類で、重々難いものを、焼くつづつことろも二三日時を
費し、此の、焼くことろを尋ねると

考ま類 名家の手簡類 印箋 帯曾記事の
新多於法の切りぬき 名家の書状 古版本の断片、
ニ枚ハを五六枚のほつたの本、若附拾いよみ類 出品目
録類 友人の詩稿 地圖 九丁の再建文射煙言書
大出度任歴文書の字書一冊々 最近新多於法に
よせられたるものすんで、焼くことろある、法書、遺書
金の任歴書 并に余の家、聞きたる任歴文書は、現存任歴

文書と書しれた大アハム一巻あり、他、家書果現
史料と題する冊子七あるが、此等のアハムは、奴の
以上のハ、先導に入らるゝ重々も惜しきものを、ゆけ
たのちある。

○自合の此年四月の下旬 船渡り、藝人を滿一年の
ころく、手足はあつた、硬派があつた、九月を
経てもスウキリ回復し、去りて執筆する事を
よく、是れ是れよく歩行が出来、毎日の山座と
けること、夜を感するものが、大概の日々、
十一時頃から自動車を、電車、日本橋駅まで、出
て、或る時、徒歩するが、去りて十時、夜は、家
も、早く床を敷し、書河存することろ、あつた、

○あるの年アハハハ日始りつげな久故類の内
まろゝとの左の如し

重遊記并考証

筆墨墨彦如年笈状

三浦旭村詩肉筆

大口由魚 色紙肉筆

伊原松文 篆額拓本

狩谷松高 篆誌拓本後書

新村玄 篆額

頼山陽孔石村畫決 映言本

坂口五峯三字額肉書

良寛詩以拓本二枚

源三(華山)借月心(字)

帝田大云謝書

史料編纂所長謝書

延暦寺用印三顆印文二枚

市島克 詩肉書

野口英世謝狀

安宅先生紀行(分りの如し)

坂口五峯詩稿

坂内進道謝狀

寺部宮清巖寺鐵塔墨圖

小畑存草稿

吉刊支冊收太平記(一)就七

因陀羅跋

金剛場此因陀羅断片字書

宋元各家意散後

世界英傑言三の跋

和名隨亭自叙傳(映本)

三友人曰言三其好内是此也

大和四三輪石佛字三三三枚

備名垣並日文書行數枚

新河遷全勢集

清卷書術家傳物与先金錢治之書故枚

曲亭馬琴父の日記断簡二枚

上代欽全考 柏木探古

小抄塵記

法田和山居士手簡

大之保彦左五工の筆蹟 三河和泉

任の述邊書簡

山内朝雄居士手簡

松本宗回手稿大根辰故并今合道傳文

市島家の手紙 上巻の末所載

印的文化感謝書

華也栗山書簡

和府再建の及財煙字三

大根家更書字三

宇大同之師の寄贈書目録

活字印刷の歴史：活字の余の著作品目録

余の活字並活字の行

教科書と本の歴史余の文庫一冊行

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史

良寛和尚の活字の歴史

活字の歴史余の出品目録

余の英文活字 雑誌大日本活字

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

活字の歴史余の出品目録

新出魏碑

鄭校標拓本

三字額

小室持表碑 四景奉

天保十年刊赤松義士古像

紫野瑞光院藏

順德帝行宮遺跡碑

山陽觀音寺南ノ古奉

亨苑院

韓政心任

大加文博士の八ノ上ノ額

任由古造三味線銘の額

千重堂

吉田半近銘 櫻葉決斗銅印之文

徳市蘇峰寺古奉

記任定一部庭園字云

日本文化九年表

細人画家栗里山あり切

乃木大将治流考初撰

本朝寺三十六家集致証

勅行の宴節の縁起一乘

行記上人筆御名所

兜山源太郎の巻を讀む

桑田園子堂卷成三付相持状

心道軒講法お夕一

心字お夕一十枚板

西亭馬琴年譜

梅原在士脚本稿

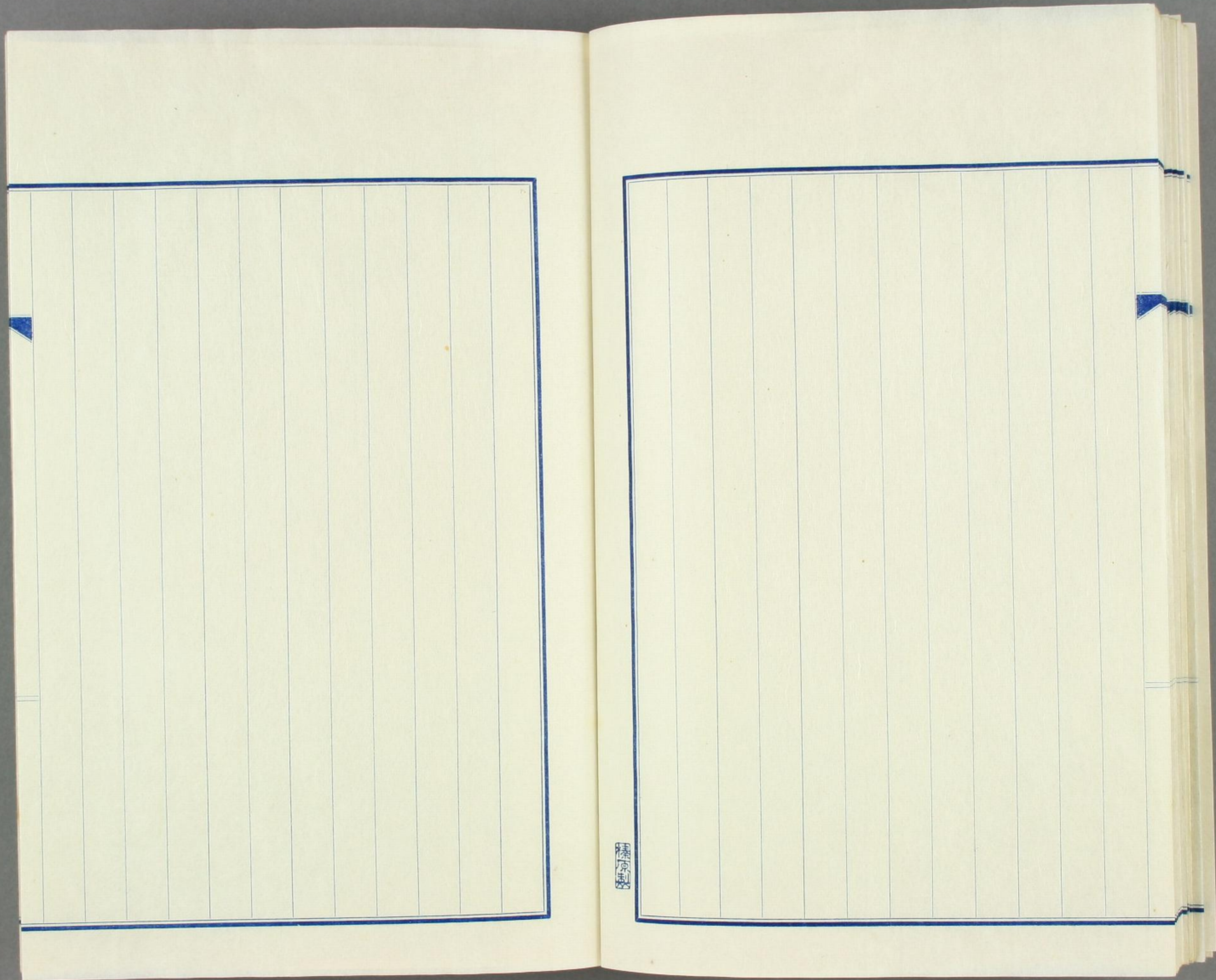
清忠畫稿

清方畫稿

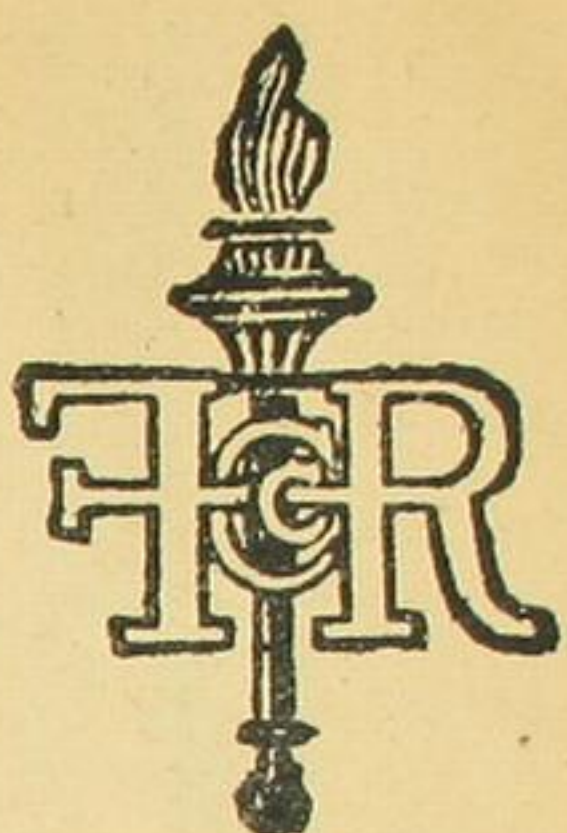
雷堤換畫

滿口退翁山卷書跋

江見水茂河智書扇



東京製



外國の和紙文獻

壽岳文章

唐書東夷列傳に、「蕭に似た」日本紙の記事があり、入唐沙門最澄が海郡の太守陸公に筑紫斐紙を獻じたこともあまねく世に知られてゐる。中世に入つて明や南海との通交貿易が盛になるにつれ和紙も相當送られたであらうから、和紙が支那や南海を経てかなり古く西洋へ傳はつてゐたであらうことも十分想像される。しかし西洋人が直接和紙を知り初めたのは、勿論ポルトガル人やスペイン人の來朝以後である。嘗て私は「和紙外傳考」なる一文を發表し、和紙

西漸の概略を述べたことがあつた。史料が乏しく、明快な跡づけはできなかつたけれども、平戸に本據のあつた英國商館、それに代つて日本との通商を占有した和蘭商館では勿論和紙をも取扱つてゐたであらうし、レムブラントが日本の紙にエツチングを試みた頃には、和紙はもう西洋人の間にかなり親しまれてゐたに違ひない。有名な英國の日記

家チヨン・イーヴリンは、一六六四年六月二十六日、耶蘇會士トムスンなる者が舶載した日本紙を見てゐる。西洋人に依る和紙へのかうした零細な言及に觸れてゆくのも興味が多いが、ここでは相當にまとまつた和紙の外國文獻だけを拾つてみることにする。

第一に登場するのが例のケムベルである。本誌の昭和十二年十二月號に、幸田成友博士も紹介してをられるケムベルの *Anno 1671* *Batavia* (異郷佳話)こそ、實にわが紙漉業の最初の科學的な詳述であつた。これは西紀一七二二年(正徳二年)レムゴオで刊行された羅甸文の書物であるが、その四六六―七六頁に和紙のことが記されてゐる。一七二七年の英語版を初刊とするあの有名な「日本志」の附録となつてゐるのはこの翻譯である。多少の疎漏はあるにしても、記述頗る詳細、精巧な圖版を挿入して楮や黃蜀

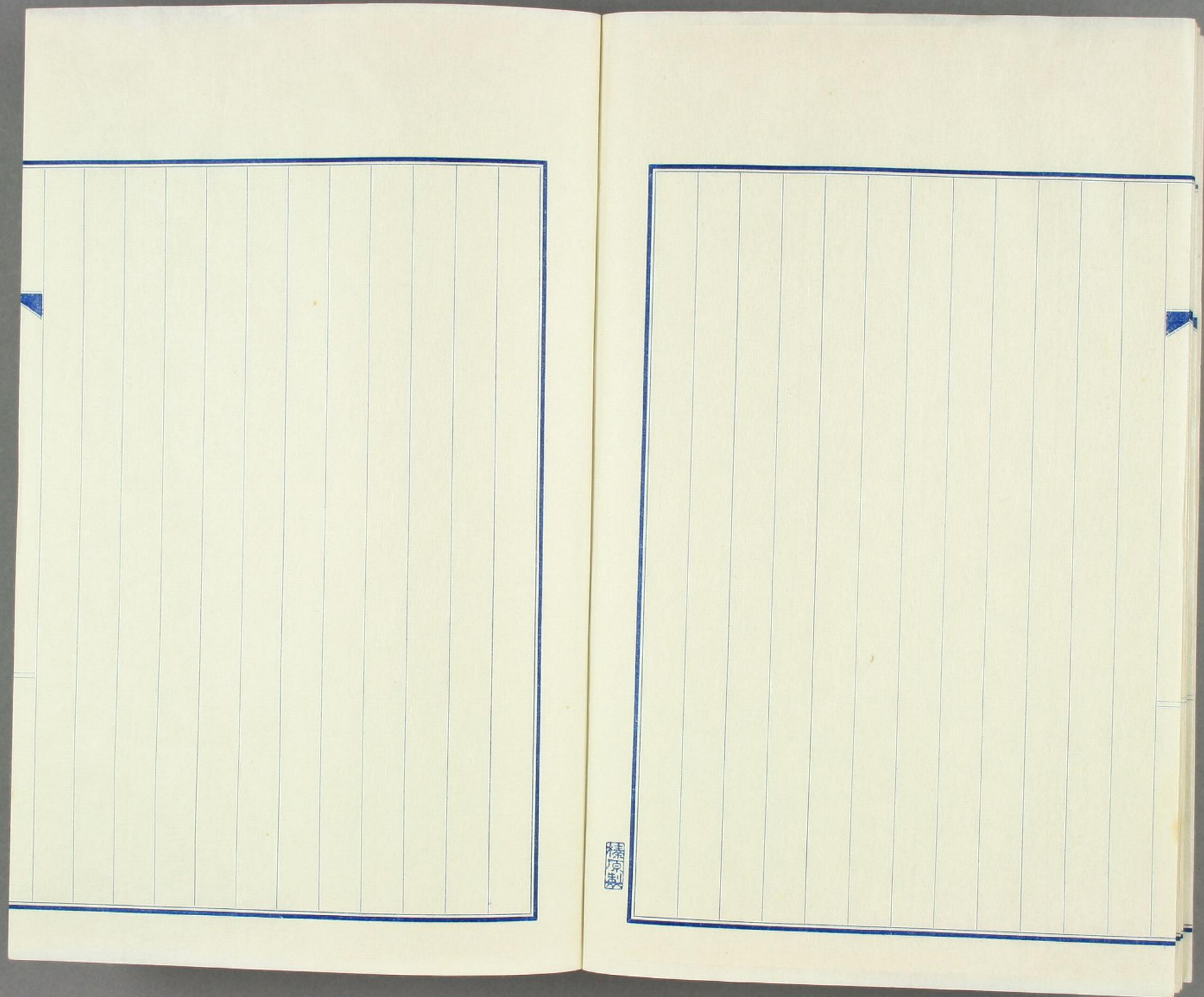


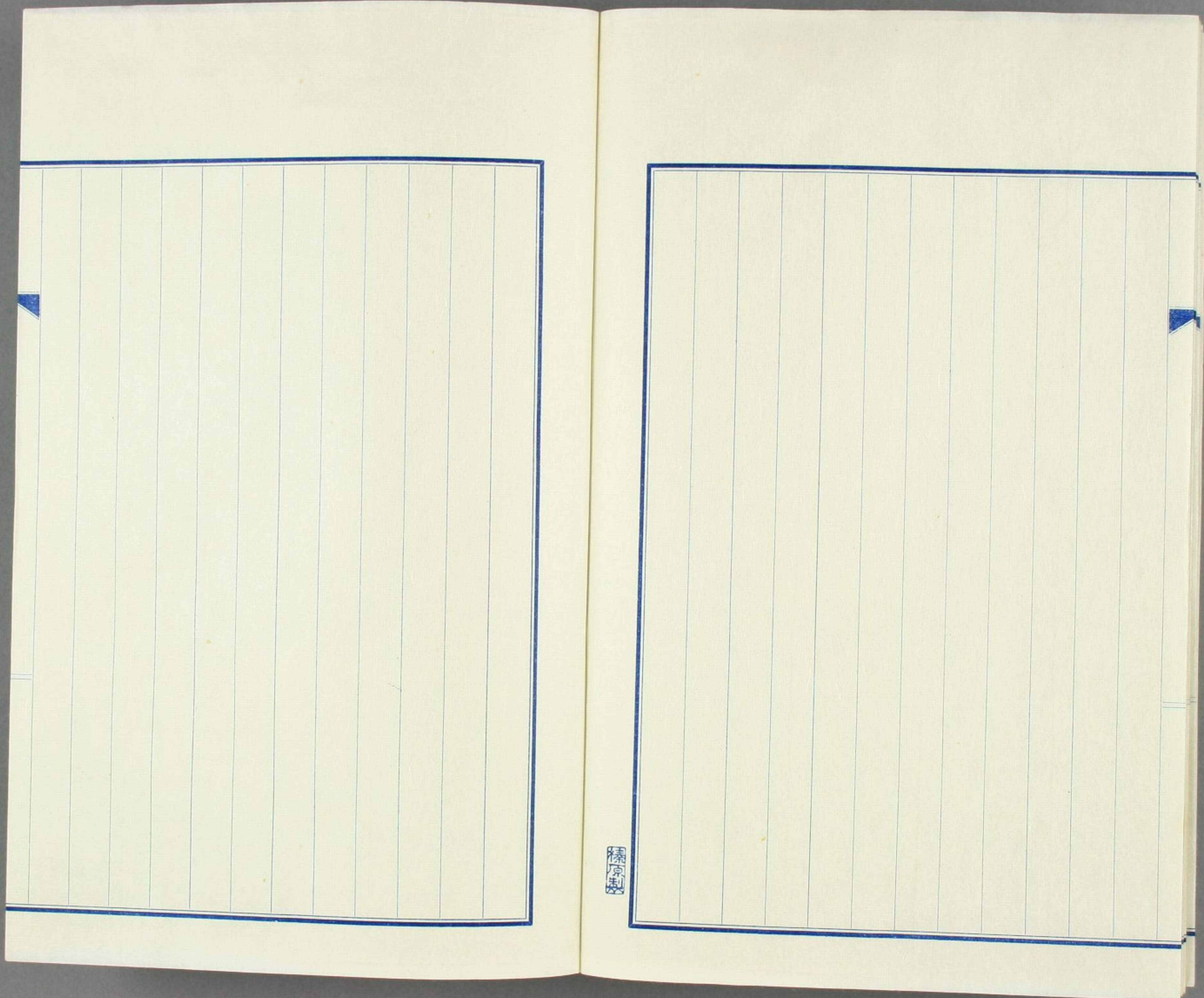
行先も限られてゐたので、本當の和紙の味や深みにまで到り得てゐないのはやむを得ないところである。和紙の歴史についても誤解や誤記がある。しかし日本語を解せぬ彼がこれだけの大著をなしたことは、日本人も大いに感謝せざるはなるまい。

ハンタアは和紙を「世界に於ける全製紙技術の奇蹟」(the technical marvel of the entire papermakers' craft)と稱へたが、和紙を「恐らくは現今漉かれてゐる最も美しい紙」(perhaps the most beautiful papers that are made)と賞めたクラバトンも和紙にいたく心ひかれてゐる手漉紙研究者の随一である。彼にも紙に関する幾つかの述作があるが、和紙の歴史を詳しく論じ、國東治兵衛の「紙漉重寶記」を挿繪ごと紹介してゐるのは一九三四年ロンドン刊の「世界手漉紙考」(Paper: An Historical Account of Its Making by Hand from the Earliest Times down to the Present Day)である。ところが不思議なことに、クラバトンはこの本の中で一七八一年刊のリーズ百科全書(Abraham Rees: Cyclopaedia)に「紙漉重寶記」の完譯——實はケムヘルからの抄記——が挿繪もろとも出てゐると云ふ。重寶記の出版は前述の通り寛政十年で、西曆一七九八年に

當る。本國で影も形も見えぬさきに、遠い英國で譯本が出版される筈はない。リーズ百科全書は屢と版を重ねてゐるから、重寶記の翻譯が出てゐるとしてもきつと後の版だろう。昨年私は在英留學中であつた早稻田大學の尾島庄太郎氏に依頼して、どの版を最初としてその翻譯がでてゐるかを調べて貰つたが、まだよくは分らない。ほかの人にも頼んでゐるから、そのうちはつきりした事情がわかるだらう。

以上が、今までに出た外國の目ぼしい和紙文献である。これに比べると日本の和紙文献は、質に於てすぐれた特殊なものはあるが、まだ全體として外國のと太刀打はできぬ。折角勉強して、質量ともに彼等をして見かへらしめる邦英兩語の和紙文献を出さうと私は大いに頑張つてゐる。この秋日本の紙を調べにやつてきた印度國立美術工藝學校教授チトラ君の話によると、印度ではガンヂイが主唱して大いに手漉紙の復興を計つてゐるそうな。やがて印度手漉紙に関する英文の著述も出ると聞いた。質量共世界第一と折紙をつけられてゐる和紙の研究は、先づ我々日本人の手でもつともつと盛にしなくてはなるまい。





東京製



像座の茶一(四)

朝上人無と靴下馬
時より大井敷を洗ひ月夜

茶室
1.

